

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



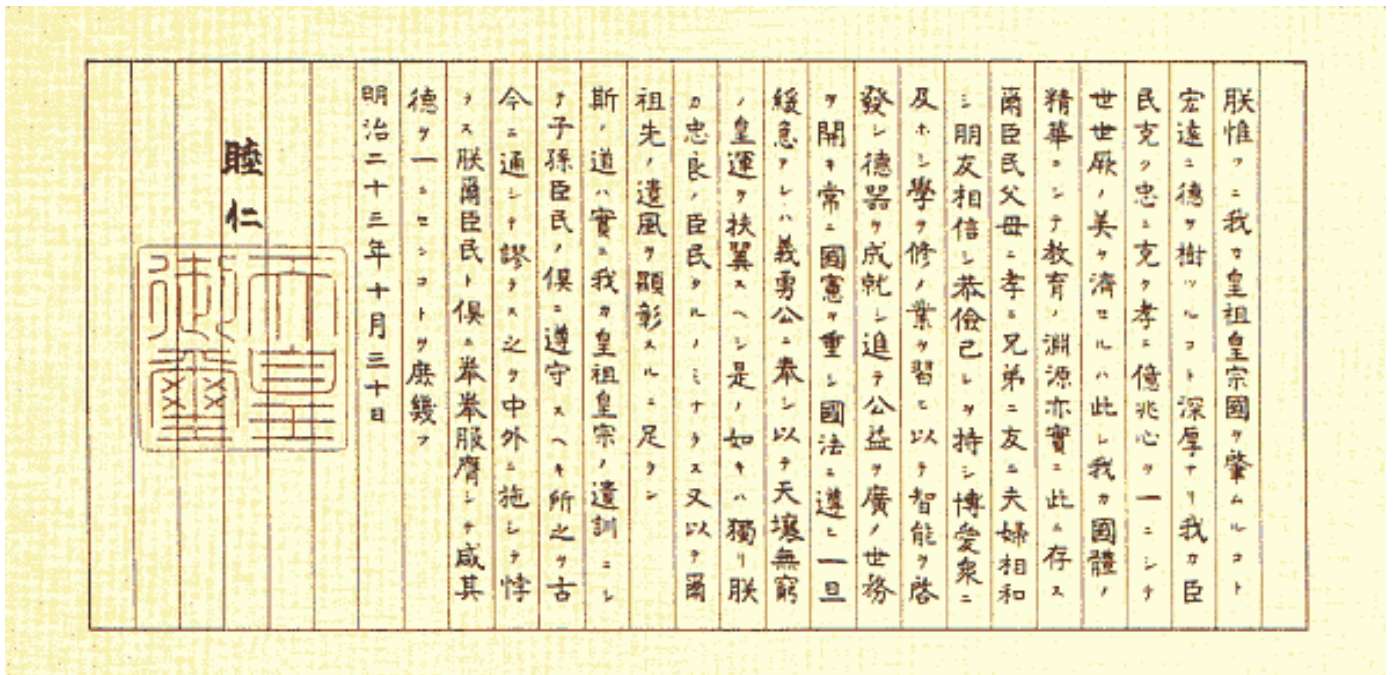
明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0018号
護國青年會議 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成17年10月25日

教育の荒廃と失われた日本の正義

編集人/戸出蒼流

現下の教育の荒廃や墮落した社会を憂える時、戦後そのものを問い直し、メスを入れなければ、何をどう変えれば良いのかという結論には至らない。周知の通り、戦後の教育システムはGHQの強制的指導によって画策され、戦前の教育を全て否定する中でつくられた形態である。例を挙げれば、古き良き明治の世にあって、教育の根幹を為し得ていた「教育勅語」の排除である。GHQは「教育勅語」を排斥し、日本の歴史も文化も伝統も否定して、日本社会にそぐわない欧米式の民主主義を取り入れた教育基本法を押し付けたのである。連合国にとって、敗戦で憔悴し、先人の培った民族の誇りと魂を失いつつあった日本人を操ることは、いとも容易いことであった。



米国が主導権を握るGHQによって葬り去られた教育勅語には「(前略)父母に孝行し、兄弟は仲良く、夫婦も仲睦まじく、友人とは信頼しあい、礼儀を守り、自らは身を慎み、人々には博愛の心で親切にし、学業に励み、仕事を身につけ、さらに知識を広め才能を磨き、人格を高め、進んで公共の利益の増進を図り、社会のためになる仕事をし、いつも憲法を大事にし、法律を守り、ひとたび国家の一大事となれば、正義に叶った勇気を奮い起こし、国家公共のために身を捧げることで(後略)」という一節があるが、これこそ現代人が喪失した日本人として最も肝要な道義であると思う。しかし昭和26年6月19日、GHQの不合理な指図により衆参両院で「教育勅語」を排除及び失効が決議された。迂闊にも日本人は自由には規律と責任が、権利には義務が表裏一体となっていることを黙殺し、欧米式民主主義の表層部分だけを取り入れてしまったのである。この時から我が国の教育の荒廃と米国による日本人の精神支配の序曲が始まったといえるのではないだろうか。

教育の荒廃は青少年の心を蝕み、いじめ・登校拒否・校内暴力の誘因となり、さらに彼等を援助交際や凶悪犯罪へと走らせる。何が日本の若者を墮落せしめたのか、そこには種々の要素が起因している。例えば長年に亘った日教組による教育現場の支配、教師の質の低下、偏差値第一主義、ゆとり教育の導入などがあげられるが、特に指摘しなければならないのは、教育現場で中国や韓国のプロパガンダをそのまま記述している自虐的な歴史教科書を採用しているということである。現在我が国の小中学校で使われている歴史教科書は、青少年に日本人としての誇りを持たせ、公に尽くす使命感を持たせるという点においては意に染まない内容である。この歴史教科書が青少年にどのような悪影響を与えるのか、彼等が成人した後の日本の行き着く先はどうなってしまうのだろうか、今を生きる我々が次代を担う青少年に何を伝え、何を残すべきか真摯に考えねばならない。

世界のどの国民も、それぞれ固有の歴史と文化を持っているように、日本には日本の歴史があり、独自の文化と伝統を育んだ時代があった。その遺産によって今日に至るまで自由社会の一員として、その中枢を

為し得てきたのである。嘗て日本は文化や倫理道徳を非常に重んじる民族であった。平安中期には紫式部が「源氏物語」を、清少納言が「枕草子」を執筆し、女流作家として世界文学史上稀有な存在として評価されている。平安後期から鎌倉前期にかけて名を馳せた西行や藤原定家は、日本独自の花鳥風月を五感でとらえ、みそひと文字の文学として遺している。31文字の短歌に託した彼等の表現は、優れた絵画より美しい芸術作品であるといっても過言ではない。また江戸中期の享保元年には佐賀鍋島藩士・山本常朝の武士道に関する談話を、同藩士・田代陣基がおよそ7年の年月を費やし筆録編集した「葉隠」が完成している。その中に「武士道とは、死ぬことと見つけたり」という有名な言葉があるが、これは「ただ死に急ぐこと」を言っているのではなく「生きることの大切さ」を説いているのである。日本人の精神の根底に流れる「武士道」は約100年前新渡戸稲造によって翻訳され「“Bushidou” The Soul Of Japan」というタイトルで出版され世界的ベストセラーになったことがある。今日の社会秩序の乱れを思うと、青少年の教育に「現代語訳した教育勅語」と「武士道」を取り入れ、誤った教育によって染み付いた自虐感を払拭し、彼等の心に日本人の誇りと魂を刻み込まなければならないと考える。

60年以上前、欧米諸国が東アジアを侵略しようとした時、日本は自国の正義とアジア諸国の正義を守るため唯一人かんぜんとして立ち上がり、欧米列強の不正義からアジア諸国民を救ったことがある。しかし今、情けないことに我が日本は、支那や韓国の理不尽な内政干渉にもものも言えず為すが俛となっている。この体たらくな状態を打破しなければ日本に明日は無い。このままでは働いて得たものを反日国家に献上するアリのような民族となってしまいが、それでも良いのかと問いたい。支那や韓国の容喙によって書き換えられた教科書を破棄し、封印された日本の立場、日本の主張、日本の道義を解き放ち「正しい日本の歴史教科書」を自らの手で作り上げねばならない。これ以外に、罪を擦り付けられたまま亡くなられた先人の無念を晴らし、失われた日本の正義を取り戻す方法は無いと信じる。日本をこのまま崩壊させて良しとするのか、それとも日本人の叡智と情熱をもって日本の将来のために立ち上がるのか、選択の時は来ている。 皇紀2665年10月25日

首相の靖国参拝にもの申す



ポケットに手を入れ
賽銭を取り出す首相

去る17日小泉首相が靖国神社を参拝した。参拝の内容は神道の参拝形式をとらずに一礼だけの略式で、ポケットから小銭を出して賽銭箱に投げ入れるだけのものだった。私人を強調した参拝だったが公用車を使ってやって来たりと矛盾に満ちた参拝であるし、皇恩を感謝して御国の為に命を散らした御英霊を愚弄する行為であり、到底看過することはできない。ただ行きさえすればよいのだろうか？ 形式は問題ないのだろうか？ 否そんな話が通るわけが無い。例えば、大恩ある人の葬儀に平服で出席する者が居るだろうか、香典を袋に入れずに出す愚か者が居るだろうか・・・。日本の長である小泉純一郎はこれらと同様の行為をしたのである。首相の極めて無礼で非常識な参拝を断固糾弾する。

陛下への赤心の念を滾らせ散華なされた御英霊の御一人は「日本民族がまさに亡びんとする時にあたって、身をもってこれを防いだ若者たちがいたという歴史がある限り、500年後、1000年後の世に必ずや日本民族は再興するであろう」と仰っている。我々はこうした先達の想いを受け止めて、世論を正しい方向へ啓発し、皇尊の精神を発露していかなければならない。誰かが始め、誰かが引き継ぎ、誰かが広めていかなければならない、未来の日本人の為に・・・。

編集部 / 吉田源太

「何があっても8月15日に靖国神社に参拝する」と言っていた小泉首相が今年も公約破りの参拝をした。しかも個人としてである。何故に8月15日に公式参拝をしないのか・・・。先年首相が鹿児島県の知覧特攻基地を訪れた際に、流した涙が本物ならば、あれほど無様な参拝はできないはずだと思う。御英霊を政治利用し冒瀆した小泉は許せない。祖国日本の首相に騙され続けた御英霊の無念を晴らす為にも今後二度と今回のような参拝をさせてはならない。

取材部 / 小杉雄一

降りしきる小雨の中、内閣総理大臣・小泉純一郎が就任以来5回目の靖国神社参拝に踏み切った。中国や韓国を始めとする諸外国不当な内政干渉や国内においては赤い影が見え隠れするような大阪高裁の判決で違憲性が指摘される中参拝したという事実だけは認めよう。しかし私的参拝に拘り過ぎたせいか、ブラウン管から映し出されるその姿や仕草からは首相の言う「御英霊に対する哀悼の誠」は全く感じる事ができませんでした。

今回の参拝は、内閣総理大臣・小泉純一郎と記帳しての昇殿参拝を取り止め、あくまでも私的を装う拝殿前の参拝であった。鳥居をくぐる時に頭も下げず、手水舎で手や口も清めない、ポケットから賽銭箱に小銭を投げ、一礼し手を合わせ再度一礼するという無様で御座なりの参拝であった。物知らぬが故の無礼だったら受け流すこともできようが、自らの保身を謀らんとするが為の参拝には流石に怒りすら感じると同時に、日本人の一人として慙愧に堪えない。

編集部 / 秋山慎一郎